



# みちくさ

2016. 2. 23 No. 19

## 上巳の会が終わりました

本校で大正3年から行われている上巳の会が無事終了しました。当日お忙しい中、たくさんの保護者、地域の方々にもご参観いただき、励ましをいただきました。ありがとうございました。当日朝、何人かの子どもに上巳の会の意味を聞いてみたら、「校長先生！知らないの？昔の遊びをする日だよ」と言われました。上巳の会については、正しい意味を知らせておく必要があると思い、改めて調べてみました。

じょうみ（じょうし）の会は、300年頃の中国で起こったとされる、元々雛祭りとは別のものです。「巳」の字は十二支の蛇を表します。旧暦3月の一番最初の巳の日を「上巳」といい、春を喜び、無病息災を願う厄払いの行事でした。のちに行事の日が変動しないよう、3月3日となりました。



この上巳節が日本に伝わってから、宮中行事として、紙や草でつくった人形（ひとがた）で自分の体をなでて穢れを移し、それを川や海へ流すようになりました。流し雛は今でも鳥取あたりに残っているそうです。平安時代、貴族の間で人形遊びのままごとが盛んになり、その遊びが上巳節と一緒にあって、ひな人形に厄を引き受けてもらい、健やかな成長を願う「桃の節句」の雛祭りに変わったようです。（参考：日々是生き生き-暮らし歳時記より）

片平丁小では、「上巳文芸会」として始まりました。「昔の遊びをする会だよ」というのはまんざら外れていませんでした。当時学校に通っていた子どもたちは全体的に質素であり、貧しい家庭に育っている児童も少なからず、ひな人形をもっている子も一部の子に限られていたようです。そこで、学校にひな人形を飾り、「文芸の集い」を開いたのがその始まりでした。

戦前は女子児童だけで開かれました。今も続いている「正月は正月は」のまりつきの他、舞踊、劇、ピアノ演奏などが演じられたようです。その頃、卒業生に「一番の思い出は」と聞くと、「上巳の会」と答える程、冬休み明けから一生懸命練習して、後々まで残る会になったようです。昔は講堂がなかったので、教室の間仕切りを外して行った時代もあったようですが、それでも手狭で、旧天文台前にあった公会堂の新館に場所を移して行った時代もありました。

戦後、男女同席の教育が始まり、上巳の会も一緒に行われるようになりました。「ひな祭り学芸会」として、講堂がなかったので3教室を通して講堂代わりにし、1日目の午前は低学年、午後は高学年、翌日は保護者へと、同じ演技を3回繰り返していたようです。現在の  
上巳の会の一コマ  
上巳の会は、昭和30年代の終わり頃のものをやや簡素化した形で継続しています。（参考：松浦順一先生の記録による）

## お雛様の由来

職員室前に飾ったお雛様はけっこう古いものです。この出所がよく分からなかったのですが、でも毎年飾っている大切なものなのです。もちろん、私が20年前に勤めていたころも、同じものを飾っておりました。

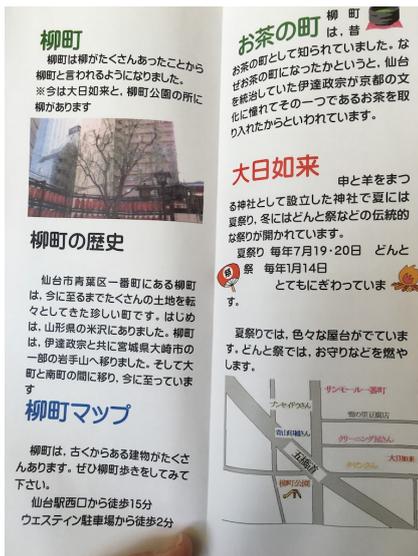
先日、上巳の会にお客様としてお見えになっていた同窓会長の齋藤壽久さんや副会長の山原悦子さんに教えていただいたのですが、この雛人形が、本校同窓生である相馬黒光さん（本校卒業生で実業家、新宿中村屋の創始者）から送られたものであるということなのです。また、会長さんたちが子どもの頃、上巳の会に合わせて、中村屋の月餅が送られてきて、みんなでおいしくいただいたという話もお伺いすることができました。昭和30年代前半のお話ですから、お菓子などもふんだんにいただける時代ではなかったと思いますが、こんな逸話が雛人形に、そして上巳の会に残っていたのですね。とっても素敵なお話だと思いました。

会長さん曰く、「食べ物のことだから忘れていない、間違いない」とのことでした。学校にいらっしゃったときに、ぜひご覧ください。



相馬黒光さん

## 片平の魅力が満載



上巳の会が行われた同日、6年生が1学期から取り組んできた総合的な学習の時間の発表を、お世話になった方々をお招きして行いました。お客様には子どもたちがつくったパンフレットも配りました。

「自分たちの町の宝物を生かした『未来の町』を地域の方々に紹介しよう」というので、何か新しい箱物でも作って、片平ってこうなればいいな！というような発表かと思っていたのですが、全く違っておりました。子どもたちが考える未来の町とは、人と人とのつながりをもっと密にし、今ある地域の様々な施設や情報を、もっと大切にしていこうということでした。町づくりを行っている大人がとっても勇気づけられる、素晴らしい発表でした。やがてこの子どもたちが大人になったとき、同じように地域を支えてくれる人材に育つ

てくれればと思いました。